

サービス付き高齢者向け住宅の持続性に関する研究 その6

－ 中山間地域集住体の高齢者の暮らしと周辺地域との関係性について －

日大生産工(院) ○藤間 悠生 日大生産工(院) 蛭川 黎
 日大生産工 北野 幸樹
 福岡大・工 野田 りさ
 (株)プラスニューオフィス 瀬戸 健似

1. 研究の背景と目的

本稿は、前稿に引き続く一連の研究である。前稿ではサービス付き高齢者向け住宅（以下サ高住）について、人・活動・空間・時間の相互関係に基づき、居住者属性、地域との関わり、住戸内の空間・環境の調査結果について考察した。本稿では、アンケート調査結果並びに集計結果を参考に、参加型調査を基に居住者の生活、意識の変化や居住者同士の交流、周辺地域との関わり、1日の生活、日常生活・生活環境の満足度について考察することにより、持続可能なサ高住、並びに高齢者の地域居住についての基礎的知見を得ることを目的とする。

2. 調査概要

調査概要（調査対象地・調査方法）は前稿と同様である。加えて、余暇活動に関するヒアリングシートを基に調査を実施した。内容としては「1日の過ごし方」「自室の具体的な使い方」である。

3. 暮らし方と居住者意識の変化

3.1 共用室について (Fig.1, 2, 3, 4)

各共用室について、2013年と2022年を比較するとともにヒアリング調査とアンケート調査より考察する。

「音楽室」については、大きな変化は見られなかった。ヒアリング調査とアンケート調査より、多くの入居者が習慣として利用していることから欠かせない要素であるといえる。また、現在は実施されていないが、音楽室本来の使い方に加え入居者同士の麻雀や百人一首などを楽しむなど、交流の場として重宝されることが分かった。

「図書室」については、比較すると大きく変化していることが分かる。これは、居住者が入居する前に持っていた本や使わなくなった椅子などを寄付して、「図書室」を居住者同士でより使いやすいうように、変化した結果だと言える。各共用室はフローリングにワックスが施されているが、これは居住者からの木の節が乾燥で割れているなどの指摘により実行された。

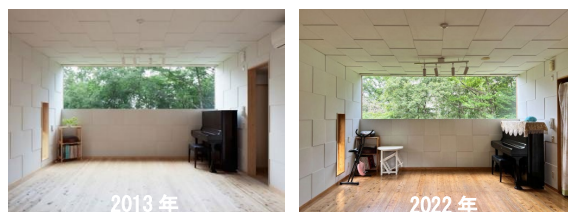


Fig.1 音楽室



Fig.2 図書室

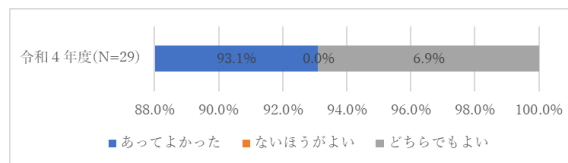


Fig.3 共用室の満足度

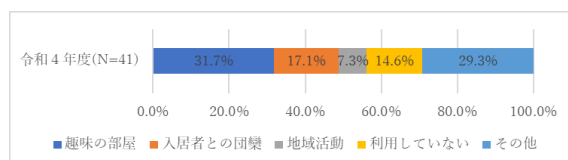


Fig.4 共用室の使われ方

3.2 中庭について (Fig5, 6, 7)

2013年の「中庭」は植栽が少なく、簡素である印象を受ける。それに対し、2022年の「中庭」は入居者が好きなものをきれいに植えていることが分かる。入居後に新しく植栽を始めた人もいることから居住者の生活に変化をもたらしている一つの要因に「中庭」があげられると言える。

「中庭」は、各居住者が玄関前を各自の区画として、管理することになっているが居住者の中には足が悪い方もおり、そういった方はサークル活動である「花と緑の部会」が中庭の手入れを各自でできない人などに代わってガーデニングや畑

仕事をし、自然を管理している。中庭の満足度としては、居住者の約96%の人が満足傾向にある。また、中庭の使われ方として、「趣味の活動」が半数を占め、「入居者同士の団欒」が約36%あるが、「利用していない」と回答した方が約13%いる。



Fig. 5 中庭

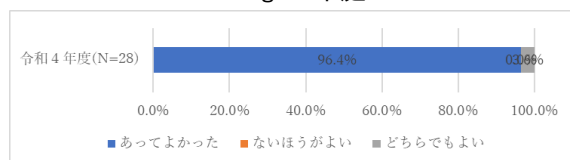


Fig. 6 中庭の満足度

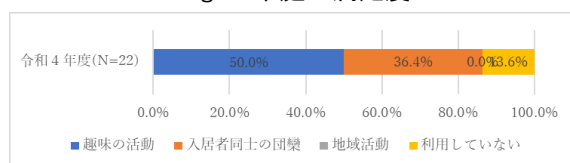


Fig. 7 中庭の使われ方

3.3 エンガワドマについて (Fig8, 9, 10)

2019年と2022年を比較した際に、「エンガワドマ」の使われ方が変化していることが分かる。2019年は自室を趣味のガーデニングの延長線上とし、自室から楽しめるように工夫しているのに対し、「エンガワドマ」で他の居住者との交流や余暇活動が行われる場へと変化しているが、Fig10より「玄関」として使われている方が約47%を占め、その次が「物置」が35%占めている。これは、スペースが狭い、住戸内は自身のプライベート空間でありたいという点から、本来の意図である人々が団欒する場とは違う使われ方をしている。



Fig. 8 エンガワドマ

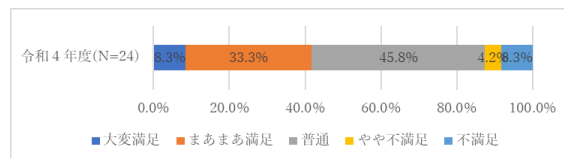


Fig. 9 エンガワドマの満足度

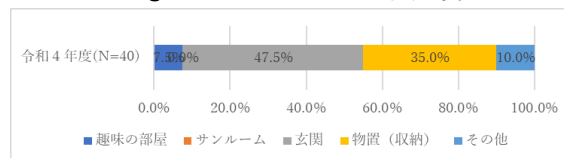


Fig. 10 エンガワドマの使われ方

4. 日常生活・生活環境

4.1 医療面について (Fig. 11)

医療面での満足度は2013年では78%、2019年では27%と下がり、2022年では35%と少し上がったが、2013年より下がっている。

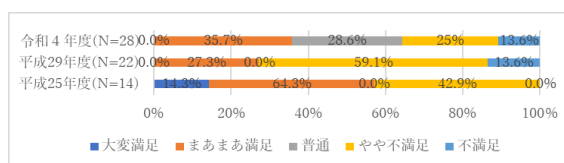


Fig. 11 医療面の満足度

4.2 食事面について (Fig. 12)

食事面の満足度は低くなっていく傾向がある。これは、おいしいものが食べたいという意見や、今年の場合はコロナによる食堂の予約制になったためだと考える。

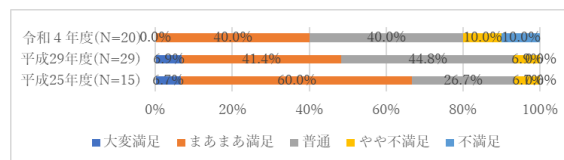


Fig. 12 食事面の満足度

4.3 健康管理・安否確認について (Fig. 13)

満足層が年々増加傾向が見られた。現在の健康管理の仕方が玄関前に専用の磁石をだし、安否確認を行っている。現在のような深く心配などをされることもなく困ったときに程よく頼れるという距離感が良いと思っている人が多いのではないかと考える。

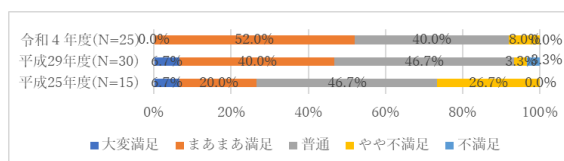


Fig. 13 健康管理・安否確認の満足度

4.4 生活支援について (Fig. 14)

満足層が40%から37%と減り、不満層が14%から20%と増えている。これは、「生活支援とはどのようなことをしてもらえるのかわからないので説明してほしい」と回答する人が多かった。その点から情報共有が上手く行われていないことが今後の課題であると考ええる。

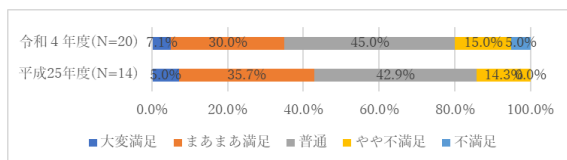


Fig. 14 生活支援の満足度

5. 1日の生活について (Fig15, 16)

余暇活動の大半を自室や「ゆいま〜る那須」で過ごしている入居者が多い傾向にある。居住者は住戸内の変化に応じて住みやすい様に間取りを変化させ、工夫して生活している。

コロナウイルス流行後、サークル活動の一部が制限され、不要な外出が控える状況の中、「全体的に満足している」と回答する居住者が多い傾向

がある。この理由として、自然環境が豊か、住戸の広さが必要最低限で管理しやすい、中庭を介した交流、共用室での趣味や運動による交流があげられているからではなかと考える。また、余暇活動の大半を自室や「ゆいま〜る那須」で過ごしている入居者が多い傾向がある。この理由として、の広さが必要最低限で管理しやすい、中庭を介した交流、共用室での趣味や運動による交流があげられる。特に、周辺環境が自然豊か、中庭を介した交流は、入居理由の上位の回答項目であり、創設から10年が経過する「ゆいま〜る那須」が変わらずその魅力を維持し大型商業施設をはじめとした周辺施設に移動するハードルが高いことも影響していると考ええる。周辺施設への移動手段として最も多い、ハウス送迎者「ゆいま〜る号」は、多い日で4便/日、少ない日で2便/日、白河方面と那須方面に運行しているが「帰りの時間を考慮すると自由に施設の滞在する時間が取れない」、「用事が長引くとタクシーなどを利用して自力でハウスに帰ってこないといけない」と指摘されており、居住者が自由に予定を組む事が容易ではない事が考えられる。以下が回答していただいた方の各部屋の1日の生活についてになります。

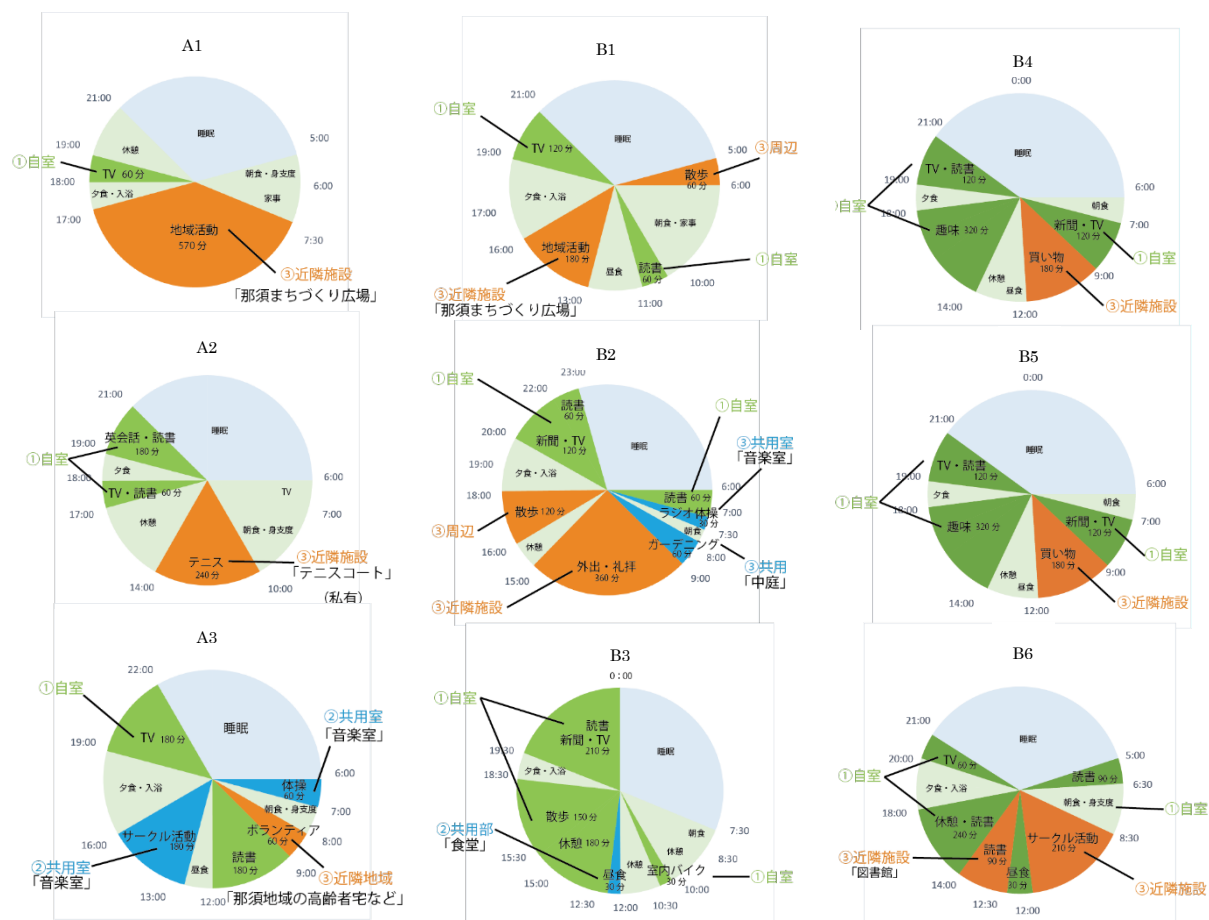


Fig. 15 A棟、B棟、の居住者の1日の生活

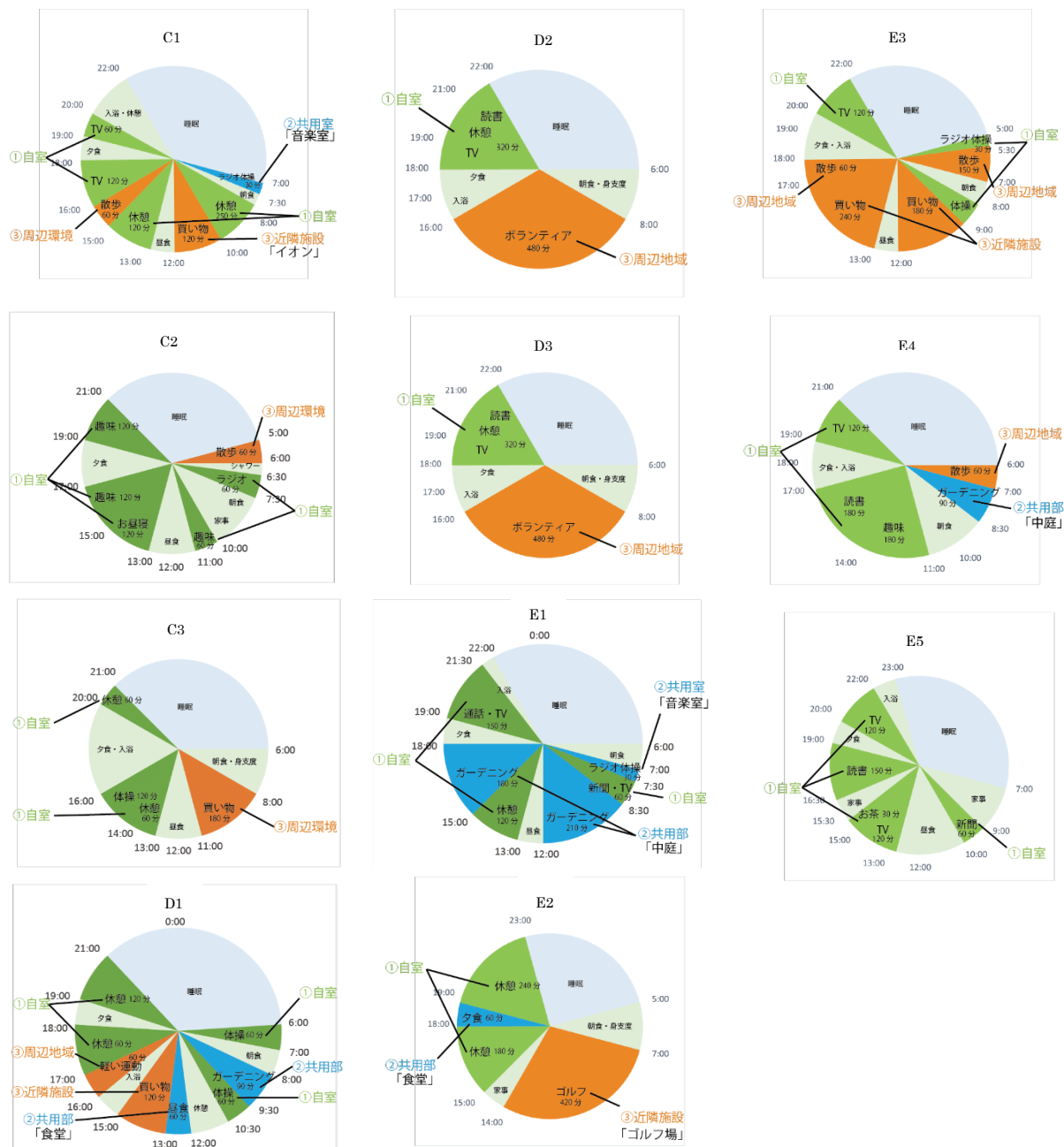


Fig. 16 C棟、D棟、E棟の居住者の1日の生活

6. まとめ

本調査から得られた基礎的知見について、10年間の経年変化、高齢者の暮らしと地域との関わりの視座から以下の通り考察する。

- 1) 「共用室」に関して、居住者同士の交流の場として使われることで、新たな趣味ができる、友人ができるなどから居住者の生活や居住空間の変化に深くつながっているのではないかと考える。
- 2) 「中庭」に関して、「あってよかった」という居住者が多い傾向があり、他の居住者の影響を受けて、ガーデニングや畑仕事を始めたという居住者がいることから「中庭」から広がる他の居住者との交流があると考えている。

3) 「ゆいま〜る那須」に入居することでの生活の変化は生活するという物理的変化に加え、他の居住者との交流による互いに影響しあうことでの社会的環境の変化があると考えている。

4) 1日の生活に関して、コロナウイルス流行後行動が制限される中で「全体的に満足している」と回答する方が多いことから、ゆいま〜る那須の魅力である自然豊かな環境、中庭などのゆいま〜る那須内の施設が居住者の満足度を高めていると考えている。

参考文献
前項と同様